



子どもの貧困・女性の貧困

この自然豊かで人のつながりが濃い青森にも、貧困や困難を抱えて孤立する家庭がたくさん存在します。支援活動に取り組む現場から、困窮家庭の子どもたちの現状をご紹介します。

青森における現実と支援者の声

ドメスティック・バイオレンス、ネグレクト、ヤングケアラー…カタカナで語られる言葉は、どこか遠い大都市で起きているニュースのように感じられませんか？ しかし、ここ青森でもその事例はすぐ身近にあります。2020年の国勢調査を元にした比較では、青森県の母子世帯数は8097世帯（約1・59%）、都道府県別では8番目に多い数字です。ひとり親世帯の貧困率は全国的に高く、経済的に困難な家庭が多くあります。

今回は県内で子どもの居場所づくり活動や見守り活動をしている方々に、実際に目にした事例をお話しいただきました。（事例は個人が特定されないように配慮をしています）

弘前市に拠点を置く一般社団法人みらいねっと弘前では、弘前市からの委託を受け、困難な状況にある家族の訪問見守り事業を行っています。週1回から月1回の訪問頻度で20世帯ほどを訪れています。ひとり親家庭の世帯が多く、その中でも母子家庭が9割になります。

ある農村部へ移ることがあります。しかし、小学生は1人で学区外に出ることが禁止されていて、学区内にはスーパーもコンビニもありません。大人は車を使えますが、子どもには移動の自由がありません。子ども食堂などの子どもの居場所も街中に多く、そこまで行く手段や時間がありません。単純なお金の有無よりも、選択肢がないことに貧困を感じます。

学校や職場以外で話せる人がいることが大事

みらいねっと弘前では、困難を抱える家庭を訪れ、親や子どもから話を聞き、フードバンクの食品を渡しています。できるだけ子どもがいる時間帯を訪ねるようにしていて、「ただ物を持ってくるだけの人」にならないようにしています。渡すものも親が家事をしない家にはすぐに食べられるものにするなど工夫しています。

自分から「困っています、助けてください」と言える人はまだいいのですが、本当に危険なのは、助けを求めることができなくなっている人たちです。昔は、地域の中でこの誰の子か

数センチだけ開いたドアの向こうに

ある訪問家庭は、母親と子ども2人の3人暮らしでした。最初に訪れた時、警戒しながらドアをそとと開けたのは子どもたちで、数センチだけ開いたその向こうには腰くらいの高さまで積もったゴミの山が見えました。食品を渡したり、話しかけたりし続けるうちに心を開いてくれ、雑談を通して、子どもたちの方から悩みを打ち明けてくるようになりました。

今は子どもたちも中高生になり、自分で行動できる範囲が広くなりまし



がわかり、声のかけ合いがありました。今は家庭のプライバシーに踏み込むことはしにくい時代です。孤立している家庭を訪問していると、コミュニケーションの不足を感じます。

「もしこのお母さんに友達がいたらだいぶ違っただろうな」と思うことは多々あります。いかにつながりを作れるかが大事です。困難な状況の中にある子に「あなたのことを気にかけているよ」と関わる大人がいることが、この先も記憶に残ってもらえればと思います。

地域のネットワークづくり

みらいねっと弘前では、子ども中心の居場所を作る団体のネットワーク会議を運営しています。弘前市だけではなく、近隣市町村の団体も参加しています。子ども食堂、乳児院、居場所活動をしている団体、大学、行政も参加し、課題の共有や情報交換をしています。

参加団体の一つである「ちいきの居場所」がCAFÉの代表は、「誰にも悩みを言えず一人を抱えている親や子どもがいる。経済的な貧困の解決

た。とても素直で強く生きていて、お母さんや周りの人のことを恨んだり悪く言ったりすることはありません。家の中は依然厳しい環境ですが、訪問の最後に「お氣をつけてお帰りください」と子どもが声をかけてくれます。

小学生のヤングケアラー

別の訪問家庭は、母親と子どもの2人暮らしでした。母親が体調を崩すとトイレに行くこともできず、小学生の子どもが下のお世話もしていました。引越したばかりで土地勘も無く、近所のドラッグストアでモヤシを買って、炒めて食べていました。子どもが学校に行くとお母さんが一人だけになるので欠席が多くなり、友達と遊ぶこともできない状況でした。

市役所からの情報で訪問した頃は生活保護や障害者手帳の申請もされていなかったで、ケース会議を開いて支援の道筋を付けました。

「選択肢が無い」という貧困の形

シングルマザーになったお母さんが経済的困難のため、市街地から実家が

だけではなく、話を聞いてくれる人の存在も大事」と話しています。

また、不登校の親子サークルの代表は「子どもが学校に行けなくなった時の相談先が平日の日中だけの場合や、親の付き添い登校が必要な場合は仕事を休まなければならず、シングル家庭だとすぐに生活が苦しくなる」との悩みも聞いています。

お互いに干渉しないことが良しとされる時代の中、地域に生きる子どもたちが孤立しないよう、誰もが安心して子育てできる環境を目指し、新しい絆のつなぎ方を模索しています。

（取材…斎藤 美佳子）

